【 巻 頭 言 】

「熱測定 2020」と熱測定学会の国際化

日本熱測定学会 会長
広島大学　古賀 信吉

令和 2 年, 2020 年を迎え, 新春のお慶びを申し上げます。私こと，昨年 10 月に開催された第 55 回熱測定討論会（近畿大学）での第 46 回総会において，齋藤一弥前会長から会長の任を引き継ぎました。振り返れば，いずれの時代もそうであったような気も致しますが，刻々と変化する社会・経済，学術分野でのまた開発分野での研究及び人的環境，ならびに熱測定装置の市場の動向のなか，日本熱測定学会や会員の皆様を取り巻く環境も随時変化しております。そのような状況において，日本熱測定学会は，先達の先生方に構築いただいた学術的および組織的基盤をもとに，それぞれの会員のニーズに合った学術団体として逐次変化しなければならないと改めて思うところです。齋藤前会長を中心に前幹事会により始められた毎月の「熱測定エクスプレス」のメール配信および熱測定に関する相談窓口としての「熱測定コンシェルジュ」の開設は，熱測定誌，熱測定討論会，学会賞・奨励賞の授与，熱測定スプリングスクールおよびサマースクール，熱測定ワークショップ，各ワーキンググループの活動などに加えて，会員のニーズを重視した事業として今後随時必要な修正を加えながら定着させていかなければならないものと認識しております。また，第 46 回総会においては, 会費の値上げについてご承認いただきました。これに合わせて会員の皆様へのサービス向上とさらなる学会活動の充実を目指すべきと考えております。

さて, 元号が替わってから初めてのお正月となりました。令和 2 年は，「東京 2020」の年です。1964 年の前回開催以来，56 年ぶりの東京でのオリンピック開催ということで，日本選手のまた国の枠を超えたスター選手の活躍で明るい話題がいっぱいの年になることを期待しております。オリンピックイヤーは，本学会の関係する大きな国際会議の年でもあります。本年 7 月 19 日から 23 日の予定で，第 26 回を迎える IUPAC－国際化学熱力学会議（ICCT-2020）が英国ロンドンで開催されます。また，8 月 30 日から 9 月 4 日の予定で，第 17 回国際熱測定会議（ICTAC 2020）が，クラクフ（ポーランド）で開催されます。さらに，9 月 9 日から 11 日の早稲田大学での第 56 回熱測定討論会を挟んで，9 月 18 日から 20 日には，第 11 回を迎える日中合同シンポジウム（CATS-2020）が山東省泰安市（中国）で開催されます。まさに今年は，「熱測定 2020」です。国際会議が乱立する昨今ではありますが，これらの国際会議は，規模的にも歴史的にも本学会の直接関連する国際会議の中で特に重要な会議です。是非とも，多くの会員の皆様にご参加いただき，熱測定の最先端の研究成果のご発表を通じて，国際的な活躍の場としていただきたいと願っております。

この機に，熱測定を取り巻く国際情勢について思うところを述べさせていただきます。1989 年，ベルリンの壁が崩壊した当時から数年間，私はプラハ（当時チェコスロバキア）の科学アカデミー物理学研究所の学生でした。東欧諸国での熾烈な政治的抗争を経て，ヨーロッパにおける共産主義政権が，またソビエト連邦が崩壊し，学生たちは自由主義（資本主義）社会へのあこがれと新たな社会への夢を熱く語り合っておりました。1993 年には，欧州共同体が発効し，浅はかながら，このまま世界は共同体として国の枠を超えた理想的な発展を遂げるのではないかとの期待を抱きました。しかしながら，国際社会の動きは，そのように単純ではありませんでした。昨今の国際情勢を見渡すと，政治的，経済的，さらには軍事的紛争の火種が世界各地に散在しております。我が国においても，複数の隣国との関係悪化が懸念されているところです。

このような国際情勢を横目にして，熱測定にかかわらず科学分野の国際化は，加速度的に進行しております。国際市場を重視した開発研究や熱測定装置の拡販は，企業の将来にかかわる重要課題とされていることは言うまでもありません。欧米で研究成果の評価指標として取り入れられた H-Index や G-Index は, その不可解な算出方法にもかかわらず，我が国の大学や研究機関にも従順に取り入れられ，それらに直接かかわる SCI 論文（Science Citation Index ExpandedTM 収録雑誌論文）のみを，さらにはインパクトファクターの大きい学術誌に掲載された論文のみを研究成果の評価対象とする風潮は否めません。学術研究の本質とは異なる評価とはいえ，このような評価が研究資金や研究人材の確保に大きな影響を及ぼすことは避けられない事実です。欧州各国の熱分析・熱測定学会の年会への参加者数は減少の一途で，地域ごとに複数国合同での会議開催へと変容しています。北米熱分析学会の年会でも，かつての盛況は見られません。この時代に基礎研究を続けることの難しさの一端を表しているものと思います。その中で，熱測定討論会の盛況や熱測定誌の発行を含めた日本熱測定学会の活動状況は，国際的にも屈指の状況となっております。しかしながら，さらなる国際化の取り組みなしにこの状況を維持することは難しいように思います。学術研究，開発研究，装置開発にかかわらず，国際的に活躍する熱測定分野の若手人材の育成は，本学会の喫緊の課題の一つとして挙げなければなりません。幸いにも，本学会には国際的に活躍される多数の先生方がおられます。若い会員の皆様には，本年開催の複数の国際会議の機会を活用して，範とすべき先生方にならい国際舞台に登壇していただきたいと願うところです。そのような折に，昨年度から運用が開始された本学会の若手奨励金制度を是非ご活用ください。2022 年には，大阪で ICCT-2022 が開催されます。本学会としても，ICCT-2022 の成功に向けて可能な限り尽力し，若い会員の皆様の国際的な活躍の場として活用していただきたいと考えています。国際的な活躍のベースとなるものは，語学力ではなく，熱測定に関する学術レベルの高さにほかなりません。その意味では，これまでの国内での学会活動をさらに充実させることこそが，本学会の国際化への必要条件ではないでしょうか。

「熱測定 2020」, 年頭にあたり, 会員の皆様のご健康とさらなるご活躍を祈念いたします。

© 2020 The Japan Society of Calorimetry and Thermal Analysis